



愛 と 追 憶 の 日

オズワルド・ワインド

小野寺健一訳



ジンジャー・ツリー The Ginger Tree

愛 と 追 憶 の 日 本

オズワルド・ワインド

小野寺健一訳

Oswald Wynd ;

THE GINGER TREE

© 1977 by Oswald Wynd

The Japanese translation rights arranged with Campbell
Thomson & McLaughlin Ltd., London through Japan UNI
Agency, Inc., Tokyo.

ジンジャー・ツリー——愛と追憶の日本

1990年2月20日 初版印刷

1990年2月28日 初版発行

©1990 Printed in Japan

著 者 オズワルド・ワインド

訳 者 小野寺健

装幀者 沢川育由

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷 2-32-2

電話 (03)404-8611〔編集〕 (03)404-1201〔営業〕

振替 東京 0-10802

印 刷 中央精版印刷株式会社

製 本 中央精版印刷株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-20138-5

○目次○

第1部 極東へ	5
第2部 中国	51
第3部 日本	149
エピソード	329
年譜	341
訳者あとがき	349

ジンジャー・ツリー

愛と追憶の日本

○主な登場人物

メアリ・マッケンジー スコットランド生まれ。リチャードとの結婚のため、はるばる中国に渡る。だが、その地で日本人栗浜との道ならぬ恋におち、彼女は異郷の地「日本」へと向う。

リチャード・コリングズワース イギリスの名家の出。北京の英公使館付武官。メアリと結婚し、娘ジェインをもうけるが、栗浜との不倫を知ると、メアリをイギリスに追い返そうとする。

栗浜賢太郎伯爵 義和団事変で名をはせた北京の日本公使館付武官。妻のある身でメアリとの間に子供をもうけてしまうが、その後も彼なりの誠実さで日本にいるメアリを見まもっていく。後、ロンドンの公使館付武官。

イザベル・マッケンジー メアリの母。

マーガレット・ブレア スコットランドでのメアリの友人。

カースウェル夫人 ムールデラ号でのメアリのお目付け役。

マリィ・ド・シャモンピエール子爵夫人 フランス人。北京でメアリと知り合う。外交官の夫アルマンに従い任地を転々とする間も、つねに信頼のおけるメアリの文通相手。

サー・クロード・マクドナルド 北京駐在英國公使。後に東京駐在英國大使。

トモ メアリと栗浜の子。メアリには行き先を知らされないまま、養子に出される。

アリシア・バセットヒル 宣教師。メアリの日本で得た最初の友人。

小野寺愛子男爵夫人 女性解放運動の活動家。メアリのたよりになる日本での友人。

ヒロ・松坂屋 松坂屋デパート社長。

ボブ・デール アメリカ人。ミドウェスト信託銀行東京支店長。エマ・ルーの夫。メアリのファッションの店のために融資をする。

ハリー・西本 ハワイ生まれの日系人。弁護士。

ビーター・ナッソン 日系三世。生糸輸出で巨利を得たナッソン商会の社長。

第1部

極東へ

一九〇三年一月九日、ムールデラ号にて、アデン沖

昨日は誕生日なのに一日気分が悪かった。ビスケー湾でも、マルタ島の近くで嵐に遭ったときでさえ何ともなかったのに、紅海のような小さな海で酔うとはばかばかしい気がする。それでも、カーズウェル夫人の唸るのがうるさいので日没にデッキへ出て手すりにもたれてみると、二等航海士がそばへきて、わたしの具合が悪くなったのはソマリアからの大きなうねりのせいだと言った。嵐のときにあちこちへ転がされるのは平気でも、大きなうねりには耐えられない人がいくらでもいるという。この航海士はすくなくとも三十にはなっているだろうが、なかなかいい人だ。大きすぎるくらい、とても大きな手をしている。昨日がわたしの誕生日だということは、誰にも言わなかった。カーズウェル夫人にも。夫人も、わたしよりひどい船酔いにかかっていたので。

うねりは、まるですべすべした灰色の小さな山が動いてくるようだ。船が横になってその上に乗ると、水平線からまたつぎつぎに押しよせてくるうねりが見える。空も灰色で、日没にも赤くならないらしい。わたしは船室にもどって自分の寝台でこれを書いているが、真下の寝台ではカーズウェル夫人がまだ唸っている。船というのがこんなに軋むものだとは、考えてもいなかった。ここは息がつまりそうだ。船

では風が入るように舷窓に何かブリキでできたものをとりつけてあるのに、航行中でさえ、風は入ってこない。

ママにはこのノートを送ると約束したけれど、もう送らないことにきめた。ポートサイドを過ぎてからは、ママに見せるわけにはいかないことを書いてしまったからだ。スエズの東へ出ると人間が変わるという話を聞いたことがあるが、わたしもそうなのかもしれない。一昨日はそろそろ気分が悪くなりかけていたのに、まだカレーを食べる気になった。それも、カレーは前から嫌いだったのに。船で旅をしていて、自分が変わっていくのがわかるのは、何だか怖い。

だが、誰もが変わるわけではない。大部分の船客は年寄りで、変わりようもないのだ。カーズウェル夫人は、何があっても変わらないだろう。保護役の婦人に付き添ってもらうのは必要だとしても、カーズウェル夫人はありがたくないし、同室というのはやりきれない。

新しいコルセットは二日前にはずしてしまった。もう、この手紙をママに出すわけにはいかない。わたしたちが着がえをするときは、いつもではないにせよ、たいてい寝台のカーテンに隠れてするので、カーズウェル夫人はまだ気がついていない。こんなに天井が低くて暑い部屋では、とてもあんなコルセットはする気にならないので、とにかくはずしてしまったのだ。それから夫人が眠っているうちにこっそり下に降ろすと、小さなソファの下にある自分の船室用トランクに隠してしまった。さいわい、わたしのウエストはそんなもので締めなくても細いから彼女はまだ気がついていないけれど、それでも用心する必要がある。何しろ千里眼なのだ。まるで黒玉のように光っている。

ママがこんなものを読んだら、仰天するだろう。わたしがこんなものを書くのは、この船には話し相手がいらないからかもしれない。一等の人たちはブライス夫妻の他はみんな年寄りばかりなのだが、ブライス夫妻とはつきあわない方がいいとカーズウェル夫人は言う。あの人たちは「図々しい」し、赴任先もたかがシンガポールの水道局なのだから、ほんとうは二等で当然なのだと。シンガポールに着いてみ

れば、公共施設部の人たちは社交界では相手にされないのがわかって、身のほどを知るだろうというのだ。香港にいるカーズウェル夫人のご主人は弁護士だから、夫人も年に一回は総督邸に名刺を持って挨拶に行つて、総督夫人の名刺をもらうことができる。カーズウェル夫人はティー・パーティーの招待者名簿に載っているのだ。わたしも、北京へ行けばこういうことがわかるようになる、と夫人は言う。

出発前にはずいぶん人の世話になつたけれど、汗をかかずにすまず法については、誰も教えてくれなかった。中国もこんなに暑いとしたら、わたしはこれから一生汗をかいていなければならぬのだらうか。オーデコロンはみんな使つてしまつたけれど、それで涼しくなれるのは五分くらいのものだ。カーズウェル夫人に向かつて、暑い国で暮らしていらしたとき汗はどうなさつていましたか、と訊くわけにもいかない。何か手はあつたのだらうと思うのだが、あるいはないのだらうか？

一九〇三年一月十一日、ムールデラ号にて

船がちょうどインド洋に出たところ、はじめて船長が話しかけてきた。いちばん上のデッキにいと煙突から石炭の煤がとんでくるので、下へ行こうとしてしていると、船橋からやってきたのだ。大男で毛ぶかく、一度も手入れをしたことがなさそうな顎鬚を生やしていて、そこから煙草の煙が洩れていた。あまり愛想がよさそうには見えないので、わたしは話しかけられないように後ろを向いたのだが、彼はそのまま手すりの方へやってくると、大きなうねりに遭つたけれども、もうちゃんと歩けますかと訊いた。大丈夫ですと言つてから、インド洋はあまり好きではありません、いつでもこんな暗い色をしているのですか、とわたしは訊いてみた。われわれはモンスーンの跡を追いかけているからで、いつもならすばらしいブルーなのです、と彼は言った。わたしはまだ一度もすばらしいブルーなど見たことがない、地中海でさえ色調は違つても灰色だった、こっちは水蒸気が上がっているので暑い灰色ですけれどと言つと、船長は、ここからは南極の氷山までずっと海ばかりで四千マイルありますと言ふ。彼はオーストラ

リアの難航路で帆走の訓練を受けたので、氷山のすぐ北にある南緯四十度から五十度にかけての暴風雨地域をしじゅう走ったのだが、一度などは全島真つ黒な岩山ばかりで、ものすごく大きな、一年中強風が吹いていて誰も住んでいない島で、あやうく難破しかけたそうだ。こう言つた彼は、わたしが怖くなくなったのではないかと思つたのだらう、ひどい訛のある言葉で「だけんど、すんべえするこたあねえよ、娘さん、難破なんかしやしねえから」と言つた。船長の名はウィルソンというのだが、わたしはそのときまで彼がスコットランド人だとは気がつかなかったのに、そうだとわかると何となくこの船が安全な気がした。

船長がいなくなつても、まだ石炭の煤からは逃げられなかったから、これはぜったい髪にかかつてしまったと思うのだが、そのとき二等航海士が、早くも船長の話を探り出そうとして、姿を現した。この二等航海士はウェールズのカーディフの出身で單調な話し方をする男だが、手すりの上のわたしの手に、さわりはしないものの、しきりに自分の手を近づけようとする。彼はわたしが結婚するために中国へ行くことを知っている。カーズウェル夫人が、スエズ運河を出てまもなく、ある日彼がわたしのデッキチェアのそばに立っていたときに教えたからだ。船がまだ地中海にいたときには、彼はわたしになど見向きもしなかった。たしかに暑さは人を変える。

ゆうべのディナーには、一人で出た。カーズウェル夫人はスチュワード스에運ばせたコンソメしか飲めなかったのだ。もっとも、寝台には起き上がつて、わたしが髪をいじるのを見ていたのだが。コルセットのことに気がついていなければいいと思う。メイン・サロンには他にも現れない人があつたので、長いメイン・テールブルの一角は、ほとんどわたしとマラッカの判事だけになつてしまつた。マラッカの判事はお腹のでつぱつた非常な年寄りで、定年を前にして、本国での最後の休暇から任地へ帰るところである。前にはよくウィスキーを飲んでたのに、やめてしまつたのは、カーズウェル夫人が嫌がつてゐるのに気がついたせいらしい。まさか、判事ともあろう人がカーズウェル夫人の思惑など気にすると

は、考えてもみなかったのに。ゆうべはスーブと同時に飲みはじめて、三杯あけた。船はまだローリングをしているので、皿が滑って膝に落ちてこないようにテーブルのまわりの「フィドルズ」という板が上げである。判事がわたしにワインをすすめたので、もちろん断ったのだけれど、なぜかほんとうは飲みたかった。気をつけていると、船長は一、二度、上座からわたしを見た。デイヴィーズ氏も同じように、ずっと小さなテーブルの席から何度も見ているようだった。食事のときテーブルがいっしょの人たちが嫌いなのだろう。年寄りばかりで、若づくりになっている女さえ四十くらいにちがいないのだ。この女は、夜には思いきって胸を出す。カーズウェル夫人は、あの女は汕頭スズマの英国領事の夫人だけれど、あばずれたと言う。ゆうべはごてごてと中国風の刺繍をした、ひどく派手なボデイスを着ていた。わたしは、ママの趣味ではあっても自分では嫌いな、茶のドレスを着ていた。それでも、この船なら充分だ。新しいドレスは手つかずにとつてあつて、大部分は結婚衣装みたいにまだ薄い紙でつつんである。水玉模様のボイルを着てみようかとも思つたけれど、カーズウェル夫人が見ているので、やめることにした。

翌日、ムールデラ号にて

二等では大騒ぎだった。ある夫人が寝台にいと、大きな鼠が一匹、頭の真上のパイプのあいだを駆けぬけたのだ。二等船室では天井まできちんと仕切つてないので、鼠はパイプを通り道にできるのだ。どうやらその夫人はたてつづけに悲鳴をあげて、医師が来るまで止まらなかつたらしい。カーズウェル夫人は、あんな医師がよく役に立つたと言う。彼女は、この医師は何か過去があつて船に乗りこんでいるのだと信じているのだが、どういう過去だと思つていいのかは教えてくれない。おかげで、カーズウェル夫人が一等へも鼠が来るかもしれないと言ひ出して、夜は、舷窓も、すこし風が入るようにカーテンを引いておくだけでなく、きちんと閉めなければならなくなる。わたしの頭上にもパイプは走っているのだが、これはみんな鉄の壁の小さな穴を通っているから安全だと思ふ。

その嵐のことが頭にあつたせいか、わたしは一等のメイン・デッキの端へ行つて、ずいぶん長いあいだ立ったまま、上から二等を見ていた。二等船客が使えるデッキはハッチの周りから船倉のあたりまで、スクリューの上になる最後尾の屋根の下だけしかなく、デイヴィーズ氏の話ではサロンもひとつしかないらしい。二等ではこのデッキを、食事をしたり、本を読んだり、針仕事をしたり、あらゆることに使うのだ。ピアノはない。一等には二台あつて、一台は紳士用の喫煙室なので、これはむろん弾いたことがないけれど、もう一台談話室にあるのはブリキのような安っぽい音がする。ジブラルタル海峡を出た直後にこれでショパンのマズルカを弾いてみたけれど、やめてしまった。カーズウェル夫人は音楽が嫌いなのだ。

そんな場所に立つて二等船客を見ているのは悪いと思った。運動にデッキの周りを歩くときには、その辺はさっさと通過するのだ。ところが今日は何となく見たくなつて、足をとめてしまった。子供を二人連れてくる若い婦人がいて、どちらも女の子なのだが、あんな船室ではさぞかし大変だろうと思うのに、この子たちはいつでも清潔なエプロンをしている。わたしはその婦人と話してみたいのだが、むろん、機会はなない。黒いローブを着たカトリックの坊さんが三人いる。デイヴィーズ氏は、あれはイエズス会士だと言う。わたしがイエズス会士を見たのは初めてのはず。彼らは小さな本を見て口を動かしながら、ぐるぐるハッチの周りをまわっている。わたしがカトリックの人と話をしたことは、すくなくともカトリックだとわかつていて話したことはないはずだ。スコットランドにはかなりカトリックがいるのだが、わたしの住んでいた南エディンバラでは、一人もいる話を聞いたことがない。わたしたちは、みんな長老派なのだ。

一九〇三年一月十四日、ムールデラ号にて

明日はセイロンのコロンボに着く。わたしにとっては初めての極東の土地だ。この船が着くと二、三

時間以内に英国に向けて出帆する郵便船もいるので、スエズ以来手紙を出す初めてのチャンスなものだから、午前中はずっとママに手紙を書いていた。船長から聞いた話は書いたけれども、このノートに書いてあることはあまり使えない。デイヴィーズ氏のことは書かなかった。朝まだ早いうちからインド人水夫たちが頭の真上のデッキを洗うので、その音で目がさめてしまうことも書いた。あまり、書くことはない。すこしは嘘も書いた。手もつけていないのに、針仕事をしていますとか、母にもらった『日々の思い』を毎朝食事のあとで読んでいますとか。この本を読むのは、まだマルタ島にさえ近づかないうちに、やめてしまったのに。毎日の教えが書いてある信仰の本みたいなもので、何となく好かないのだ。まだビスケー湾を走っていたころ、カーズウェル夫人が何を読んでいるのかと訊くので渡してあげると、夫人は聖書だけあればあたしはたくさんだと言って、すぐ返してよこした。夫人が聖書を読んでいるところなど見たこともない。持っているのなら、うまく隠してあるのだろう。夫人の持ち物は、みんな見たはずなのだから。夫人は物を散らかしておく。狭い船室では、これはやりきれない。わたしがこれまでに人といっしょの部屋に泊まったのは、アヴィモ（スコットラ
ンドの町）のブレア家へ泊まりに行つてマーガレット・ブレアの部屋に泊まったときだけだが、マーガレットの部屋はものすごく広くておちつかない。たものの、気にはならなかった。

カーズウェル夫人は、熱帯では必要なのだと言って、ランチのあととはかならず昼寝をする。ドレスを脱いでガウンに着がえてから、寝台に横になるのだ。夜寝るときに夫人の上の寝台まで上るだけでも嫌なのに、昼間からそんなことはしたくない。それに彼女は「ティフィン」と称するインド人のカレー味のランチをたくさん食べるので、いびきをかく。そんな船室にいるのはたまらないから、わたしは早々に逃げ出して、たいていは自分のデッキチェアへ行つて座る。船の図書室から借りてきたサー・ウォルター・スコットの『セント・ロナンの温泉町』を読んでいるのだけれども、あまりおもしろくない。ママはわたしは本好きではないと言うのだが、それは教訓が嫌いだからだ。昔からあるババの書斎の本は、

宗教的なお説教でこそなくても、たいてい何かについての説教のようなものばかりだった。パパのことは、子供のころのことしか覚えていないけれど、当時もパパが年にせいぜい二回しか教会へ行かないのを、ママがとても嘆いていたことはよく覚えてる。わたしがりチャードと結婚して中国へ行くと言うと、一人ぼっちの未亡人になってしまおうと言って泣いたママが、パパにはハックスリー博士（リマス・ヘンズリー。一八二五—一九五、進化論の唱導者、解説者役を果たしてキリス）という人のおかげで悪魔がとりついたのだ、と言ったことがある。ハックスリー博士というのはどういいう人だろうと思ったので、名前は覚えてるが、いまだにわからない。

ローリングがほとんどやんだので、本を読んでいると、光が変わったのに気がついた。もう何日も、太陽が隠れてしまったような、灰色の、じつに妙な光だったのだ。それが急にずっと明るくなった。手すりのところまで行ってみると、海から空までひろがっている灰色は真正面の一本の線で終わっていて、数マイル先に船長が言っていたブルーが見えた。眩しくて目が痛くなるほどだったが、それは雲の切れるあたりに吹いている風で波が立っているせいじゃなかった。いま船がいる辺りはまだ静かで、油を流したようだったのだが。わたしはデッキの前方へ行って佇んだ。ほかには誰もいなかった。みんな食後の昼寝をしていたのだろう。船はだんだんその光に近づいて行くが、ここはまだ暗い。まるで一枚の絵から、別の絵の中へ動いていくようだった。するとまだ灰色の海面のちょうど内側の辺りが大きく揺れて巨大な魚のようなものが空中に跳び上がると、また落下して大きなしぶきを上げた。

「イルカだ」デイヴィーズ氏が後ろで言ったので、わたしは跳び上がった。いっごろから、そこに立っていたのだらう。わたしは海を見ているのを眺めていたにちがいないと思うと、嫌な気がした。デイヴィーズ氏は、イルカが船の前で跳ねるのを見に舳へ行ってみないかと言う。下のデッキは中国人の三等船客が使っているのだが、まだ誰もいないから通れる。そこでわたしたちはハッチや機械の並んでいるあいだを抜けて、また階段を上り、インド人水夫が暮らしている上甲板に出た。一箇所、開けたままの

ドアから食べ物の匂いとはちがう匂いがしていたが、何だったのかはわからない。ブリキの玩具の笛のような音もしたが、もっと深みがあって何だか悲しい、いい音だった。誰かインド人の水夫が故郷の唄を吹いていたのだろう。わたしはそのまま階段に立ち止まって聞いていたかったのに、デイヴィーズ氏が腕をつかまれ、ひきずりあげられてしまった。

イルカは、ちょうど光が変わる辺りで船を待っていたらしく、デイヴィーズ氏の話だとイルカは船が好きだし、船の人間に見られるのも好きなのだという。二、三分のうちに、わたしはその話を信じないわけにいかなくなった。イルカたちが、ムールデラ号の舳の周りで前後にジャンプを始めたのである。みんな船よりもずっと速く、三日月のような弧を描いて水中から跳び出すと、航路の真ん前をさらに大きな弧を描いて跳んでは、ほんの数フィートの近きまでやってくる。一頭などは、これは何度も何度も現れた同じイルカだと思ふのだが、跳んだとき体を横にしたので、キラキラ光っている体の小さく光っている黒い目が見え、その目がわたしを正面から見たような気がした。こういうことは、書くとはばかしい感じがするものだが、それまでわたしは怯えていたいろいろなこと、そしてこのノートにも書かなかったこと、それどころか心の奥にひそんでいただけの不安がとつぜん消えたのは、この時だった。そのイルカが、極東へ行ってからのことを心配する必要はありませんよ、と言っているような気がしたのだ。そのころには海風の音がかなりうるさくなっていたので、わたしは風に向かって大声で叫びたくなつた。もちろん、そんなことはしなかったが。していたら、デイヴィーズ氏はわたしが発狂したと思つただろう。訊いてみたいことがあつてふりかえると、彼はもうイルカなど見ていず、わたしをじっと眺めていた。やめてもらいたい、とわたしは思った。

船が日差しの下に出ると、微風はあつてもとても暑かった。デイヴィーズ氏が「あのやろ……！」と言う。もちろん彼は船乗りだけれど、彼が女性の前でこんな言葉を使うのにはやはりびっくりした。この言葉を聞いて、彼が見ている方を眺めてみると、船橋のあけ放ったところに顎鬚でそれとわかる船長